

「藝術とは何か」

(第九・十・十一章)

讀書メモ

平成二十一年十二月二十七日

各章の要点

九、カタルシスといふこと

「藝術は演戯であるといふ考案の最終段階といふべき章」

カタルシスといふことこそ、あらゆる藝術の本質と機能と効用とを一言のもとに言ひあはした千古不磨の名言

ギリシア悲劇における 英雄の苦悶と死、そしてその
よみがへりの喜び

われわれの肉體の新陳代謝にも似て、肉體の一部が死に
それによつて新しい生命を解放するしくみ

・ アッテカ、半円劇場において、演劇のリアリティーは
舞台の上にひびく劇場に、平土間にあつた。
ドラマを為す主体は観客にあつた。

←
観客は療治を求めて来た、劇場は行為の場所
行為の手段であつた。(カタルシスが成就する)

←
演劇は、あらゆる藝術の母胎と思はれる

・ われわれは、カタルシスを必要としてゐる

傷つけられ、苦しめ、恐れ、悲しんでゐる日常生活
ことにクリスト教文明下では、情感の抑圧が
内部醜悪し、生命の腐蝕をほじめる
あらゆる憎念(嫉妬、憎悪)や自我意識が
孤独になる

解放を
求める

・見ておもしろく、見て美しい現代のスポーツがあるか。
その快感も美感もカタルシスとは無関係

・くりかへしの意味をなさない

・記録が重要

・動ばかりで、反動がない（静止に意味がある）

・運動の主体としての精神を拒絶してゐる

われわれに刺激と興奮をよへてくれるか。カタルシスをもたらしさうなのは、スポーツは演戲しないからだ。

・藝術は完成せる内運動だ

どこから出発してもよし、どこで終はってもよい。

藝術家自身も鑑賞者も、何なるも

くりかへしおもしろい。

藝術家なら鑑賞者なら、精神の主体たる自由を

許してゐる。

・現代文明は、吃はれた好奇心のため、進歩と速度との

幻影に憑かれ、人の生理的限界を無視してまで

呼吸と脈搏とを早めようと狼狽のいとく努力してゐる。

スポーツも藝術も、こんなおいて

選民の、昇龍の、意匠のそれらにうつつしてゐる。

、こゝにも視覚の傳位か、禍根をもたらしつゝゐるのだ。

十、ふたたびカタルシスについて

・無智なる大衆は、生命力を失つてゐるゆゑに、病的症状の表面化する。（精神的苦痛を悩んでゐるものは、俗なるもの）

解毒劑を飲し、カタルシスを求め、藝術を必要としてゐる。

・ 知識階級は、金と文明の進歩との二つのものによって
すべてが解決できると思ひこめ、この枠に生命を
閉じこめてしまった。

← 生命力は、これに謀反し、枠内を攪乱しはじめるのだ。

民衆は英雄を求め、知識階級は自我意識を求め、
反撥する。

・ ギリシアの羊飼い劇場では何が行なわれていたか。

・ 鑑賞者は全く自由であった。個性とか解放されてぬ
彼らは英雄になりたいては充足させ、そうすること
英雄主義や自我意識から解放されてぬ。
彼らの精神は英雄として運動し、自己を消費し、
自我の野蔵庫をせ口にするために枯木になった。

← ギリシア人は支配・被支配の自己を持たぬゆえに、
せ口の状態を理想境とした。

・ 近代芸術において、カタルシスが十分行なはれてくるた
個性や自我も英雄になり上げぬゆえ、カタルシスを
行なひ、せ口の状態になることを嫌った。

← 自己を完成を自我意識の完成ととらへ、そのための
藝術だと考へてゐる。

・ 真の芸術は、カタルシスによって、せ口に復帰すること
意味する。精神を強化にし、健康にすること。

← 藝術は、その点において、無用、無目的、無償の
ものである。

せ口はあらゆる可能性を含むかゆみの完全なるもの。

可能性は可能性にとどまらぬから、確證を招かず
美しい。

人間は美しいものだから可能性、醜くとも
現象は真実

・近代藝術の構図

選民…彼らの自我意識の承認を鑑賞者に迫る
理想美において作者の自我が美しいといふことを
納得させようとする

鑑賞者…凝固した不純な自我意識にぶつかって、それ
同化するが、対応して自分の内部に
おのれの自我意識を凝集せしめる

←
カタルシスなためナルシスムに墜してゐる

十一、藝術とは何かー結論として

・藝術の素材、媒材の問題について

近代小説が藝術の概念を毒してしまつたとはいへ
小説家が自我意識という病菌と、果敢に戦ひ、
彼らの心臓の激しく鼓動し、肺臓の激しく呼吸したことは
事実であつた。しかし日本の読者か、その肺病や呼吸を
読みとらず、病菌にのみ目を奪はれたことが問題だ

・文学におけることばの持つ真実とは

ことば自身にのみ属するイメージと、それをいふ力にある。
その表象が対応してゐる実生活の現実にはないのだ。

←
ことばの藝術である文学は、思想や現実の表現をいふはるく
生々しい根源から、もっとも分枝してしまふ思想と現実とか、
その根源に復帰し、自己の生理を獲得せんとする運動

←
文学の中心には、あるひは頂点には、つねに詩が
なければならぬ。↓適切なことばは、精神と肉體との
出会う場所となる

演戲
← 藝術

カタルシスに在る

人間の心がこれをおめる

なぜカタルシスが求められるのか

全体離脱を試みる人間の本性がある

個人主義 自我 諸々の情念に縛られて

孤獨に陥る ↓ 苦悩

身体が生理的に不要物を排泄、解毒をして

機能を健全に維持すると同様

精神面でも、しこりとなつてゐる諸々の情念を淨化し、
排泄する必要がある

藝術がカタルシスをもたうす

精神はむしろ、秩序、平衡 ↓ 美が表出

藝術のみも観客も美しい

儀式・型をやることで

カタルシスが得られる

↓
生きかひ

喜び

全体に立ち還る
全体感の獲得

人は生きると同時に味はない

時間の空間化

・ 結論

藝術は趣味であり、一時代の趣味を養成するもの。
論理や倫理の変調を正すもの。

論理や倫理や情念があらゆるところで趣味は立ちどまる。
真が狂ふところで、美は正気を維持する。

そして美とは、時間の空間化、空間化された時間を
意味する。

真に時間を経験するためには、現実の外に虚構の
行動を、すなわち演戯を試みなければならぬ。

←
時間とはじめて、現実とは別の次元に、真の空間化を
得る。

←
藝術は人生にとって無用であるが、人生と共に
流れてゆく。↓人生もまた、何の目的も持たぬ
無用の存在ではありませんか。

感想

「読む會」も発足後、数年になるが、恒存自身が、これは私が初めて
かつお出した神輿」と語つてゐるほど、主要な作品なのに、全く
注目して来るかつたのは、不思議である。今回、今年、最後の
しめくりとして、採り上げてみて、その理由を考へてみた。
この作品は、恒存唯一の書下し評論であり、二百枚の長編
である。これまでも、長編の評論は、それなりの構へを
持つて、何回かに分けて讀んでみてゐる。獨断的
餘りに獨断的。人間、この劇的なもの。日米兩國民に
訴へる。私の國語教室。等々。なかに、何故、これは
これほど、後回しにされたのか。それは、藝術とは何かと
いふ書名のゆゑではなかつたか。恒存が、保守派の
評論家として、存在感を示したのは、政治論・文化
論のすぐれた評論活動を通じてであり、恒存の
フシのめくか、それらの評論から学ぶところのめくま
ぬんでゐたのである。戦後間もろく、文藝
けれども、三十年代の活躍期以前、第一期、第二期の
批評家として出発した恒存の、いはゆる第一期、第二期の
仕事に見られる、藝術論・文學論にこそ、恒存な
ては、人間觀が確立されてゆく醍醐味が讀みとれるのである。
しかるに、これらは、内容は、文學関係者には興味深いとい
へ、文体が晦澁で、どうもとつき難い文章がめいめいで
「保守派論者、恒存」のフシは、敬遠しかつてゐる。
で、藝術とは何かは、讀書会といふ場にも、どうも
採りあつてゐるには、そぐはるゝといふ先入感かつきまつて
ゐたのである。と、作品選定担当者の私は、反省する。
今回、この作品を再讀して気づいたのだが、まるで、これは
音楽のやうな、主旋律があつて、各章が、その変奏大
曲となつて、全体が構成されてゐる、といふことだ。

主旋律とは「現代文明に抵抗を感じず、藝術の危機」であり、危機からいかに脱出し得るかをめぐって、変奏が展開されてゐる。藝術は演戯であり、演戯はそもそもカタルシスを目的としてゐる。人間は、本性的にカタルシスを求める生き物である。文学といふ藝術は、ことばを媒材とするが、文学におけることばの持つてゐる現実とは、実生活とはちがひ、ことば自身にのみ属する。イメージとそれとは二重に二重に「ある」。藝術は「自身」の全機能の完全な調和をもたずすもの、われわれは、喜びそれ自体を、実生活から分離せしめて、材料に味ひたい。等々の新鮮な驚きをもたずす表現か、とりはめられてゐて、音楽を聴いてゐる様子を、快さを感じずる。

結局のところ、藝術とは何か、といふ作品は、類まれな文学作品なのであつて、恒存はこれを書くことで、カタルシスを得て、読者も、ことばのリスルの快感を味ひ尽くし、読むことの喜びにひたり、可能性としての人間の美しさといふ表現により、日常生活で忘却してゐる美へのあこがれを、掻き立てられずにはゐれないのだ。一十一章のどの章も、読んでも、リスルの快感が得られ、全音で、読め終へても、また読み返したくなる作品である。さうして、結ぶの忘れ難い表現だが、「人生もまた、なんの目的をもたぬ無用の存在ではありませんか」と問はれ、瞬間、受容と抵抗の矛盾した田舎みにかゝれるから、すべてはまた、この問いを自らの問いとして、北月をひつつ、ここから始まるのだと、確信する。恒存の第二の神樂である人間、この劇的なるものは、さうに恒存の思想が、凝縮された作品となつてゐるか、この二作品は、澄明な水を湧き出す泉の様である。折りにふれて、出かけて、おいしい水を飲み、清新の気もとれたいものである。